

# 検証・浦和電車区事件の真実 No. 17

民主化闘争情報 [号外] 2008年5月21日 発行 日本鉄道労働組合連合会 (JR連合)

## 第17回 糾弾 運転 糾弾で意識が朦朧

2001年2月13日の第1回臨時職場集会で徹底的に糾弾されたY氏(当該事件被害者)は、疲労困ぱいの状態だった。いくら謝っても、組合を脱退しますと言っても、それでも執拗に罵詈雑言を浴びせられるのだから、どうしようもなかった。

集会は16日まで、あと6回も計画されていた。13日と同じような集会在繰り返され続けると、絶望的になった。集団で吊し上げられることがわかっている集会出现したいはずもなく、逃げたくて仕方なかった。しかし、集会を欠席すれば、仕事中のいじめがさらに激しくなることは明らかで、本当に退職させられるのが怖かった。JR東労組が圧倒的な力を持つJR東日本で仕事を続けるためには、彼らの糾弾に耐える他に選択肢はなかった。

13日の集会終了後、Y氏は最悪の精神状態で勤務に就くこととなった。不安と絶望で、とても運転に集中できる状態ではなかったが、それでも、とにかく安全運転に努めようと必死だった。

### 泊まり勤務でフラフラのY氏を罵倒し続ける

翌14日、10時過ぎ、泊まり勤務を無事終えたが、疲れ切ったY氏が安堵する間はなかった。早く帰宅したいとの願いも虚しく、午前と午後の集会に引っ張り出された。この日も前日と同じ進行で、浦和電車区3階の講習室に約20~30人が集まり、梁次、山田、斎藤、八ツ田の各被告や分会役員D、浦和支部長Jらが出席していた。「脱退を表明しろ！」と脅され、Y氏が仕方なく「東労組を辞めます」と言うと、「おまえ脱退を表明すればいいと思ってるんじゃないぞ!」「辞めたらボーナスはどうするんだ!」「主任はどうするんだ!」などと次々と詰問された。グリーンユニオンとの関わりについてもしつこく追及された。

前日、糾弾集会の後、泊まり勤務に就き、勤務終了後の11時半から再び集会に、14時からさらに午後の集会に出席させられ、吊し上げを受けたことで、Y氏は肉体的、精神的に限界に達し、次第に意識が朦朧としてきた。この日の二回の集会は、それぞれ1時間半程度続いた。繰り返される罵声に対し、自分がどう答えたのかもわからなくなっていた。

### 自己防衛のため糾弾の様子を録音することを決意

Y氏は、東労組が自分を退職まで追い込もうとしていると改めて確信した。自分を精神的、肉体的に追い込んで、仕事のミスを誘い、それを理由に退職させようとしているのではないかと思った。多数の乗客が利用する首都圏の大動脈である京浜東北線で、万一事故を起こせば取り返しのつかないことになり、自分の責任も問われるかも知れないと思うと怖くなった。そこで、今後どのような事態が起きかわからないことから、糾弾の様子を録音しておこうと決意した。東労組の方針が徹底された職場で、Y氏を助けようとする者は誰もいなかった。Y氏は、自分の身は自分で守るしかないと思った。(次号に続く)